

があり、俗に天山の尚巴志墓と唱えているが遺骨はなく墳穴を残すのみである」とし、懐機が尚巴志死去の際に国都城外の丘陵に葬って、これを東嶽にかたどり天齐山と命名したもので、天齋は誤写であろう、とする〔東恩納寛惇全集 第七卷〕第一書房、昭和五五年）。

(4) 老祖天師 初代天師張道陵。(四三二一三)注(1)参照。

(5) 度生 衆生を救済すること。ここでは尚巴志が天に上ること。

(6) 科に依りて…加授 科儀(四三一八)注(3)参照によつて(壇上に)のぼせ、祿(法録)を授けることか。

## 1-43-21

王相懐機より天師府あて、奉献品の別幅(一四三九、〇、〇)

別幅

琉球国王相府王相懐(機)、今開す

国王府<sup>1</sup>

奏る

王相

右、謹んで天師府に拝献し、表奉して少しく香花の儀を伸ぶ。伏して惟う、尊慈、特に容納を賜わんことを。謹んで状す。

正統四年(一四三九) 月 日

注\*本文書は(四三二二〇)の別幅である。供物その他省略があるが、

(四三二一九)のような体裁であったと思われる。

(1) 府 あるいは衍字か。

## 1-43-22

王相懐機より三仏齐国宝林邦の本頭娘あて、疎遠を詫びて速やかな交易を請う書簡(一四四〇、九、〇)

琉球国王相府王相懐(機)、端肅して書を三仏齐国宝林邦の本頭娘の粧前に奉る。

知り得たるに、先に宣徳六年(一四三二)の間に於て、甚だ好信に謝し、書に憑りて収めて訖る。向後、却つて能く海道を諳んずる火長を少きて以て疎曠を致すこと多年なり。今、正使伍実佳勃也をして遠書を齎捧し代面して奉謝せしめ、備に意を送る。幸希わくは収納せよ。是に心に四海一家を盟い、永く首好を通せん。更に煩わくは共に遠来の船を憐恤するを成し、早やかに買売して回国せしめんことを。今、礼物を將て数を後に開坐す。草字不専。幸希わくは心照せんことを。

今開す

正統五年(一四四〇) 九月 日

注\*本文書は〔四三二二三〕と同時に出品された。本文書に、宣徳六年に

パレンバンの返書を受けてからの無沙汰を述べていることから、  
正統三年の〔四三一二五〕〔四三一一六〕は届かなかつた可能性があ  
る。

(1) 書 〔四三一一〇〕。なお同時に〔四三一一一〕ももたらされた。

字不専。万望むらくは心照せんことを。

今開す

白段二匹 漆盤中様二百個

漆蓋二百個

正統五年(一四四〇)十月初四日

琉球国王相府王相懷機 端肅して奉復す

1-43-23

王相懷機より三仏齊旧港宝林邦の施氏大娘あて、疎遠を詫び  
て速やかな交易を請う書簡(一四四〇、一〇、四)

注\*本文書は〔四三二二二〕と同時に出品された。同文書総注を参照。

(1) 書 〔四三一一一〕。なお同時に〔四三一一〇〕ももたらされた。

(2) 本国より来れる便船 〔四三一〇八〕〔四三一〇九〕を旧港へ持

参した琉球船。

(3) 漆蓋 原文には漆棧とある。

琉球国王相府王相懷機、端肅して貴国三仏齊旧港宝林邦の施氏  
大娘の粧前に奉復す。

宣徳六年(一四三二)に於てより、甚だ喜びて珍宝の奇並びに  
書一封を収め見る。付する所の本国より来れる便船、国に回りに到  
れば、逐一、書に憑り収めて詫る。向後、累ねて回謝して屢々貴  
国に達せんと欲するも、却つて航海の火長を少きて以て疎曠を致  
すこと多年なり。其れ感激の心、忘れざること朝夕なり。

此の為に今、礼物を備え、馳送して以て遠意を表す。惟だ心に  
四海一家を盟うのみ。酬謝を万容し、仍お笑留せんことを希う。

更に望むらくは共に遠方を憐懷するを成し、早やかに今次の入船  
をして買売に従い回国せしめんことを。今、礼物を後に開す。草